



純白の天使

テトラクリスタルアイランド

それは、とある初夏の頃のお話。

ストレンジャー達の住む『テトラクリスタルアイランド』の夏への儀式が終わった頃。
テトラクリスタルアイランドの上空では、純白の羽が一枚、舞っていた。

バサッ

「ふう、ようやく島に辿り着けました。」

それは、夏にはとても似合う薄着のワンピースを見に纏った、白い兎だった。
背丈はまあまああり、普通の兎にも見えなかった。
だが、明らかに普通の兎じゃない部分があった。

「随分と私のいた世界から距離があったんですね、こんなに時間がかかるなんて。 神の住む世界って、遠いんですね。」

そう、純白の羽を背中に持っていたのだ。
そして、自分の住んでいた世界が、神のいた世界だと。

「とりあえず、到着したのですから、下へ降りてみませんか。」

白い兎はそう言いつつ、島へと降りて行った。

「うーん。 今日もいい天気、気候もバッチリだな。」

一方こちらは、島の森の中を歩いているストレンジャー
今の季節は夏のため、いつもの服は見に纏わず、服無しのスタイルで島を歩いていた。

「俺には一番この季節が過ごしやすいな。　．．．そろそろトロピカルアイランドのフルーツも、美味しく実った頃かな。」

ストレンジャーはそんな事を呟きつつ、毎日世話をしている花園へと向かって行た。

花園へと到着すると、ストレンジャーは花の様子を見た。

『今日も元気に咲いてるな。　病気持ちもないみたいだし、元気そうだな。』

ストレンジャーは咲いている花の健康状態を気にしつつ、一通り目を通した。

『よし、今日は気合を入れて俺みずから花に水をやるかな。』

ストレンジャーは花を見終え、数歩後ろへと下がった。

「アクアブレス！」

ストレンジャーはそう言うと、口から大量の水とシャボン玉を、上空へ向かって発射した。水は数十メートル先の空へと向かって飛ぶと、重力の影響で花園へと向かって戻ってきた。ストレンジャーはその様子を見つつ、手に剣を召喚した。

「破ッ！」

ストレンジャーは持っていた剣で水をメッタ切りし、水を霧雨のような状態に変化させた。すると、水はゆっくりと花々の元へと降り注ぎ、綺麗に水を受けた。シャボン玉も数秒送れて地面へと到着し、フィナーレを決めた。

「よし、こんなもんかな。」

ストレンジャーは一瞬の水遣りショーを終え、花々を見た。すると、先ほどまで咲いていた花々は水を受け、とても綺麗に輝いていた。霧雨のような状態にしたため、水は花びらの上に少々残り、太陽の光を反射していた。

『今日も綺麗に、咲いてくれよな。』

ストレンジャーはその場に方膝を付くように座り、花を見ていた。

「あの。 そこの方。」

ストレンジャーが花を見ていると、不意に何処からか声をかけられた。

「? どこにいるんだ？」

「空です。」

ストレンジャーは声の言った事を耳にし、空を見た。

すると、そこには純白のワンピースを見に纏い、純白の羽を生やした兎がゆっくりと降下していた。

ストレンジャーは数歩後ろへと下がり、兎が着地出来るスペースをつくった。

兎はストレンジャーがいなくなった場所へと降り立った。

「お前、見かけないな。 何処の存在だ？」

ストレンジャーは地面に降り立った兎を見つつ、問いかけた。

「空の上に住んでいる、天使の1人です。」

兎は丁寧な言葉遣いで、ストレンジャーの問いかけに答えた。

「天使だって？」

「はい。」

ストレンジャーは少々耳を疑いつつ、兎に再度問いかけた。

兎は軽く頷いた。

「私はイノセント・ザ・ラビット。 空の上の神の住む世界から来た、大天使ガブリエルの末裔です。」

「大天使、上位の天使の意味か？」

「はい、その通りです。」

イノセントと名乗った兎は、軽く微笑みつつそう言った。

「貴方はとても心優しい龍のようですね。 自然を愛し、あまりお見かけしないタイプの龍です。」

「良くそう言われる。 俺には争いはあまり向いてないからな、傷つくことは避けたいんだ。」

「そんな貴方に、少しでも奇跡をお与えしましょうか。」

イノセントはストレンジャーに微笑むと、手に持っていた花の杖を取り出した。

「何をするんだ？」

ストレンジャーは何かをしようとしていたイノセントに問いかけた。

「もう少し、花園を大きくしようと思ひまして。」

「せっかくだが、それは遠慮しておくよ。」

「え？」

ストレンジャーはイノセントの行動を止めるように言った。

「どうしてですか？」

イノセントはやろうとしていた行動を止めさせられ、ストレンジャーにその理由を問いかけた。

「ここの花園は、自然に出来た場所なんだ。 貴方の力を使ってまで、ここを大きくしようとは思わないんだ。 すまないな。」

「・・・そうでしたか。 わかりました。」

イノセントはストレンジャーからの訳を聞き、杖を下ろした。

「では、他に貴方に何か出来ませんか？ 私の仕事は、良き行動をする存在に奇跡を与えることです。」

「そうだな。 俺なんかより、この島にすむ皆に何かをしてもらえないか？ ここらに住む皆は

、心優しい存在がたくさんいる。」

「わかりました。では、しばらくその様に行動させていただきますでしょうか。」

イノセントはそう言うと、足を踏み出し何処かへと向かって行った。

『不思議な存在だ。大天使とか言ってたな。』

ストレンジャーはそんなイノセントをしばらく見て、その場から離れて行った。

テトラクリスタルアイランド 泉の庭園

ストレンジャーとの会話を終え、1人のんびりと島の大地を歩いているイノセント。
先ほどまで使っていた羽は杖で先ほど消したため今は無く、普通の兎のような姿となっていた。
天使が下界へ降りるときの約束事。それは下界に住む住人達から天使だとバレない事。
自分が天使だとバレた時、心無い存在がその力を悪用してしまう。
だからこそ、この約束事は重要視させている。
イノセントもその約束事に従い、先ほど羽を消したのだ。

『先ほどの龍さんにはバラしてしまいましたが、多分大丈夫ですよ。あの方は優しいですから・・・』

イノセントは先ほどストレンジャーと交わしたやり取りを少々後悔しつつ、島の森を抜けた。

イノセントが出た場所、それはこの島の中心にある泉の庭園だった。
今の時期では芝生が綺麗な緑色をしており、綺麗なカーペットのような状態となっていた。
イノセントはゆっくりと歩き出し、辺りを見渡していた。

『素敵・・・ 下界にこんな美しい場所があるなんて・・・』

イノセントは少々辺りに見とれつつ、その場に立っていた。
すると、何処からとも無く爽やかな風が吹かれ、イノセントの着ていたワンピースが優しく靡かれた。
一瞬誰もが見とれてしまいそうな天使の1シーンだが、今は誰もいないため、特に関係も無かったりもする。

「あら？」

イノセントが泉を見ていると、何処からか声がした。
声のした方を見ると、そこにはアルドールが不思議そうな顔をしてこちらを見ていた。

「貴方、どちら様ですか？」

アルドールはイノセントを見つつ問いかけ、こちらに寄ってきた。

「始めまして。 偶々こちらに来た、イノセント・ザ・ラビットと言うものです。」

「こちらこそ始めまして。 私はアルドール・スパロウと言います。 イノセントさん」

アルドールは優しく微笑み、イノセントのそばへと来た。

『可愛い方・・・』

イノセントは自分のそばに立つアルドールを見つつ、そう思った。

「この泉って、自然に出来たものなんですか？」

不意にイノセントは、アルドールに話しかけた。

「ココですか？ 私が知っている限りでは、自然に出来たものですよ。 でもそのわりには、ちょっと変わってますけどね。」

「変わってる？」

アルドールがそう言うと、イノセントは少々首を傾げつつ言った。

「普通、自然に出来た場所なら、こんなに勢い良く水が出るとは思えないんですよ。 でも、私はこの泉が好きなんです。」

アルドールはその場にしゃがみ、泉の水に手を触れた。

水に手が触れると、水面に波が生じ、静かに波が広がって行った。

『優しい方。 あの龍さんがおっしゃったように、ここには優しい人がたくさんいるのね。』

「あ、そうだ。 イノセントさん。」

「はい？」

イノセントはアルドールを見つつ考え事をしていると、不意にアルドールが声をかけてきた。

「これからって、何か御用ってありますか？」

「いいえ、特にございませんが・・・」

「でしたら、いっしょにティータイムでもいかがですか？ 1人じゃちょっと寂しかったので。ぜひ。」

アルドールは少々遠慮がちにイノセントに頼み込んだ。

「はい。私でよろしかったら。」

「よかった。じゃあ一緒に行きましょう！」

アルドールはイノセントの手を両手で掴み、軽く引く感じにイノセントを誘導して行った。イノセントはされるがまま、おとなしくついて行った。

東 砂浜エリア

その頃、花達に水遣りを終えたストレンジャーは1人、先ほど出あったイノセントの事を考えていた。

『さっきイノセントは、自分の事を天使だと言っていた。しかも上位の大天使ガブリエルの末裔。いったい何しにこの島に来たんだ？』

ストレンジャーは少々難しそうな顔をしたまま、自分が収めるエリアへと戻ってきた。今日もそのエリアにすむ龍達は元気一杯。皆が皆楽しそうに過ごしていた。そしてまた1人、表情を変えずのんびりしている存在が屋根の上にあった。

「おーい、ブラベリー」

ストレンジャーは自分の家の屋根に座っているブラベリーを見つけ、声をかけた。

「ストレンジャー」

ブラベリーは声をかけられ、返事をして下へと降りて行った。

「・・・どうしたんだ？」

「いや、なんでもない。 今日も見張りか？」

ストレンジャーはブラベリーからの問いかけに答え、質問した。

するとブラベリーは頷きつつ、今日も平和だと言った。

「でも、知らない存在、来てる。」

「知らない存在。」

ブラベリーはふとそういい、ストレンジャーは繰り返すように言った。

「そう言うことも感知できるのか。」

ストレンジャーは少々感心しつつ、ブラベリーに言った。

「・・・ちょっと、見てくる。」

するとブラベリーはそういいつつ翼を広げ、気になる存在のいるエリアへと向かって行った。
そんな様子を、ストレンジャーはしばらく見ていた。

『ブラベリーが感知出来るって事は、普通の存在なのかな。 でも、ちょっと気になるな。』

ストレンジャーはふと考え、走ってブラベリーの後を付いて行った。

南 草原エリア

「おかわりいかがですか？」

「ありがとうございます。 頂きます。」

一方こちらは、イノセントとティータイムを楽しんでいるアルドール達。

アルドールの自室のバルコニーにテーブルとイスを置き、外でのティータイムを楽しんでいた。

紅茶はアルドールがチョイスしたもので、本日はアッサムティーだ。

「この紅茶って、美味しいんですね。」

「ええ、私が最近気に入って飲んでるものなんです。喜んでもらえてよかったです。」

アルドールはイノセントからの評価を聞き、嬉しそうにそう言った。

島の天気は良く、快晴のとても過ごしやすい気候。

自室のバルコニーで楽しそうに会話をしつつティータイムを楽しむ女性二人の姿は、絵になりそうなシーンである。

その上カワイイのだから、なおのことだ。

二人がティータイムを楽しんでいると、

バサッ・・・

何処からか翼を羽ばたかせる音が聞こえた。

「？ あ、ブラベリーさん。」

『？ ！！』

アルドールは辺りを見渡し、その人物を見つけ声をかけた。

「こんにちは、アルドール。」

ブラベリーはアルドールに軽く挨拶をしつつ、バルコニーの柵に両脚をつけた。

「どうしました？ 今日も見張りだと思ってたんですが。」

「見知らぬ存在が来てる、挨拶に。」

ブラベリーは少し体制を低くし、アルドールに言った。

「見知らぬ・・・ あ、彼女のことですか？」

『！！』

アルドールはふと思いあたる人物を思い出し、イノセントを見つつ言った。

「始めまして。」

ブラベリーはイノセントを発見し、柵から降りてバルコニーに着地し、挨拶をした。だがイノセントは、少し顔色が良く無さそうだった。

「？　どうかしましたか？」

アルドールはイノセントの様子先ほどとは違うと思い、彼女のそばに寄った。

「だ、だれなの・・・」

イノセントは少々動揺しつつ、アルドールに言った。

「ブラベリーさんですよ。　敵ではありません。」

「・・・どうしたんだ？」

ブラベリーも少々イノセントの事が気にかかり、そばに行こうとした。だが、

「嫌っ！！　来ないで！！！」

「えっ・・・」

イノセントは量目を瞑りつつ、ブラベリーに大声で言い放った。ブラベリーはいきなり言われた言葉に耳を疑いつつ、その場に立っていた。

「ど、どうしたんですか！？　イノセントさん？」

アルドールはおかしくなったイノセントの顔を見つつ問いかけた。

「あ、あの・・・」

「来ないでって言ってるでしょ！！　この悪魔！！」

イノセントは少々涙目で、自分の下へ寄ってこようとしたブラベリーに再びきつい言葉を言った。

。

「え・・・」 フラッ

バタッ！

「！ ブラベリーさん！！」

ブラベリーはショックを受け、その場に崩れて倒れてしまった。
アルドールはブラベリーの元へと駆け寄り、ブラベリーの近くへ座った。

「しっかり！」

「どうしたんだ！？ アルドール！」

その様子を聞きつけ、下にいたストレンジャーはすぐさまバルコニーへとやってきた。

「分からない！ いきなり倒れちゃったの！」

「ブラベリー！ しっかりしろ！」

ストレンジャーはブラベリーの肩に手をかけ、体を起こしつつ言った。
アルドールも少々あわてつつ、ストレンジャーに理由を説明した。

『ワ、私・・・』

その様子を近くで見ていたイノセントは、いてもたってもいられなくなり、羽を広げて飛んでいってしまった。

バサッ！

「！ 待って！ イノセントさん！！」

アルドールはそんなイノセントを見て、声をかけた。
だがイノセントは飛ぶ事を止めず、空へと向かって飛んでいってしまった。

「ど、どうしようストレンジャー……」

アルドールはもう何がなんだか分からなくなり、ストレンジャーに言った。

「とりあえず、アルドールのベットに運んでもいいか？」

ストレンジャーはとっさの提案を思いつき、アルドールに言った。

「ええ、いいわ。」

アルドールはストレンジャーにOKを出し、バルコニーと部屋を仕切る窓ガラスを開けた。
ストレンジャーはブラベリーを抱え、アルドールの自室へと運んで行った。

悲劇と応急処置

テトラクリスタルアイランド南 草原エリア アルドールの家

イノセントからの言葉に倒れてしまったブラベリー

そんなブラベリーを一時安静な場所へと運ぶため、ストレンジャーはブラベリーをアルドールの部屋へと運んだ。

「・・・」

ストレンジャーはブラベリーを、アルドールがいつも寝ているベットへと寝かせた。ブラベリーは気絶している様子だったが、息はしていた。

「ブラベリーさん、大丈夫かな・・・」

アルドールはブラベリーの事を心配しつつ、そう呟いた。

「でも、いきなり何があったんだ？ ブラベリーはただ挨拶に行っただけだったのに。」

ストレンジャーは先ほどから気になっていた事を、アルドールに問いかけた。

「ブラベリーがイノセントに挨拶をしようとしたら、急にイノセントさんがおかしくなっちゃって・・・ どうしたんだろう・・・」

「・・・そうすると、イノセントに少し問題があったわけか。」

ストレンジャーは先ほどのやり取りで何があったのかを知り、そう言った。

「とりあえずイノセントに事情を聞いて、何か言葉をかけてもらわないとな。」

ストレンジャーは今の状態からの最優先事項を考え、アルドールに言った。

「そうね。 悪気は無かったと思うけど、ブラベリーが気絶しちゃったんだもん。 あやまらないといけないわよね。」

「まあな。」

アルドールは少し気分を落としてつつ、そう言った。
すると、

パキッ！

ふと急に、部屋の何処からか、物が軋んで切れたような音がした。

「？」

「何の音？」

ストレンジャー達は辺りを見渡し、壊れたものを探した。
だが部屋には、特に割れた物や変わった所は無かった。

「気のせい・・・ だったのかな・・・」

アルドールは辺りを一通り見渡し終え、ストレンジャーに言った。

「・・・ ! まさか!!」

ストレンジャーはふと、音の正体に察しが付き、ブラベリーの寝ているベットの上へ行った。

「ど、どうしたの？」

アルドールはそんなストレンジャーを見て、少々動揺しつつに問いかけた。

「まさかとは思うが、ブラベリーの鎖に何か起こったんじゃ・・・」

ストレンジャーは少し恐れつつ、ブラベリーの着ている服に触った。

ジャリッ

すると、中から欠けた金属が擦れる音がした。

「!! まさかブラベリーさんの鎖が!!」

「そのまさかだったな。」

ストレンジャーは驚くアルドールを置き、ブラベリーの着ている上半身の衣服を丁寧に脱がせた。

ジャラジャラジャラ・・・

すると、衣服の下から欠けた鎖の山が流れ落ちてきた。

「く、鎖が！」

「嘘っ！ 何処からも攻撃は受けてないはずなのに！！」

アルドールは先ほどまでのワンシーンを脳内でフラッシュバックさせつつ、ブラベリーの身に何もおこっていないことを言った。

ストレンジャーは脱がせた服を退かし、ブラベリーの体を見た。

ブラベリーの体には、四隅に向かって延びていたはずの右下の鎖が全て切れており、何も無い状態になっていた。

残りの3つの鎖も、少しヒビが入っていた。

「マズイ、残りの鎖も切れ掛かってる！」

「そんな！ 鎖が切れたら、ブラベリーさんが死んじゃうわ！！」

アルドールは慌てつつ言った。

ストレンジャーは先ほど流れ落ちた鎖の破片を回収した。

鎖には暖かさは残っておらず、冷え切っていた。

「でも、どうして鎖が・・・」

アルドールはストレンジャーが回収した鎖を見つつ、そう言った。

「おそらく、さっきの口論だ。」

「え？」

ストレンジャーは鎖が切れた原因に察しが付き、アルドールに言った。

「ブラベリーは一度捨てられた存在の塊だ。 他者から見捨てられる言動、行動には俺達の中で

一番弱い。」

「じゃあさっきの、イノセントの言葉が・・・」

アルドールはショックを受けつつ、そう言った。

「これは、ただ事では済まされない自体になってきたな・・・」

ストレンジャーも同様に悔やみつつ、砕けた鎖を見ていた。

「とりあえず、今からマスターを呼んでこよう。 少しでも応急処置をしてもらわないと。」

ストレンジャーは次にする行動が思いつき、アルドールに言った。

「わかったわ。 私が呼んで来るから、ストレンジャーはブラベリーさんのそばにいてあげて。

ひとりぼっちじゃ、いつ切れるか分からないでしょ？」

「ああ、頼むぜアルドール。」

ストレンジャーはアルドールからのOKを聞き、そう言った。

「だが、出来るだけ急いでくれ。」

「ええ、分かったわ。」

ストレンジャーからの追加の頼みを聞き、アルドールは急いでバルコニーへと出て、マスターであるラプソディがいるカフェに向かって行った。

アルドールを見送ると、ストレンジャーはブラベリーのそばへと行き、手を握った。

「ブラベリー、死んじゃだめだ。 お前にはまだする事が残ってるはずだ。」

ストレンジャーはブラベリーに訴えかけるように、そう言った。

カフェ『Middle Garden』

「ありがとうございました～」

一方、こちらはストレンジャー達のマスター、ラブソディの働くカフェ。
一通りの接客を終え、ラブソディは少し休憩していた。

『今日も、たくさんのお客様が来て良かった。』

ラブソディは近くのカップに入ったお茶を飲みつつ、のんびりしていた。
だがそんな平和な一時を変える物音が、

リリリン♪

「あ、いらっしゃいま、アルドールさん？」

「マスター ハアハア・・・」

ラブソディは急いでその場に立ち、営業顔でお出迎えをしたが、入ってきたのはアルドールだった。

だがいつもの清楚な感じの彼女では無く、少し髪が乱れ、軽い息切れをしていた。

「どうしたんですか？ 息切れして。」

「マスター ハアハア・・・ 大変なの・・・」

アルドールは肩で呼吸しつつ、ラブソディに言った。

「ブラベリーさんの ハアハア・・・ 鎖が・・・」

「！！ ブラベリーさんの鎖がどうしたんですか！？」

ラブソディは顔色を変え、アルドールに事情を聞いた。

「ちょっと話すと長くなるけど、大変なの。 ブラベリーさんの鎖の一箇所が、碎けて・・・」

アルドールは一通り話し終え、深呼吸した。

「今何処にいらっしゃいますか？」

ラプソディは少々慌てつつ、アルドールに現在地を聞いた。

「私の部屋にいます。今ストレンジャーがブラベリーを見てるわ。」

「急いでいきましょう。お店は臨時休業です。」

「はい。」

ラプソディは急いで玄関の扉のカーテンを閉め、閉店の看板に変えた。

アルドールも協力して店内のカーテンを閉め、戸締りをした。

「アルドールさんは先に家へ。私も戸締りをしてすぐに向かいます。」

「わかりました。マスター」

アルドールはラプソディからの提案を受け、すぐさま元来た道に戻って行った。

ラプソディはアルドールが出て行ったあと入り口に鍵を掛け、裏口からアルドールの家へと向かって飛んで行った。

テトラクリスタルアイランド南 草原エリア アルドールの家

一方、ブラベリーの事を頼まれたストレンジャーは、ブラベリーの手を握り、様子を見守っていた。

幸い鎖はヒビが入った状態で止まっており、新たに壊れることは無さそうだった。

『ブラベリー・・・ アルドール、マスター。急いでくれ。』

ストレンジャーは願いつつ、二人が来る事を祈っていた。

すると、

カコッ ガラガラッ・・・

後方から物音がし、窓ガラスが開けられる音がした。

「ストレンジャー！」

「アルドール！」

入ってきたのはアルドールで、少し乱れた髪を直しつつ入ってきた。

「ブラベリーさんは？」

「今の所大丈夫だ。 幸い出かけた時と状態は変わってないぜ。」

「よかった。」

アルドールはストレンジャーから現状報告を聞き、胸をなでおろした。

「ストレンジャー君、アルドールさん。」

すると、少し遅れてやってきたラプソディは、ストレンジャー達に声をかけつつ傘を閉じていた。

「マスター すまない、呼び出したりして。」

ストレンジャーはラプソディの顔を見つつ、申し訳無さそうに言った。

「いいんです。 一大事だと聞いたので。 ブラベリーさんは？」

ラプソディはストレンジャーからの挨拶を聞きつつ、問いかけた。

「ブラベリーなら気絶して、そこにいる。」

ストレンジャーは軽く説明し、横にずれた。

「！ ブラベリーさん・・・」

ラプソディはブラベリーの変わり果てた姿を見て、少し涙目になっていた。

「理由はともかく、応急処置をしますね。」

「ああ、頼む。」

ストレンジャーはラブソディからの問いかけに、返答した。

すると、ラブソディはベットの上へ乗り、ブラベリーを抱き寄せる感じに引き寄せ、頭と体を優しく抱いた。

『・・・ブラベリーさん。目を覚ましてください。』

ラブソディは声には出さず、ブラベリーに語りかけた。

ピシッ

「う、ううん・・・」

すると、3つのヒビが入った鎖が元通りになり、ブラベリーが目を覚ました。

「ブラベリー！」

「ブラベリーさん！」

目を覚ましたのと同時に、ストレンジャーとアルドールはブラベリーに声をかけた。

「ストレンジャー、アルドール・・・」

「ブラベリーさん。大丈夫ですか？」

ブラベリーは少々ぼんやりする頭を起こしつつ、自分を抱えているラブソディを見た。

「マスター・・・自分は・・・」

「大丈夫です。ブラベリーさんは少し疲れてただけです。もう少し、お休みください。」

ラブソディは少し弱っていたブラベリーを優しく見つつ、そう言った。

「・・・ お休み・・・ マスター・・・」

ブラベリーはラプソディの言った事を聞き、再び目を閉じ寝てしまった。
ラプソディはブラベリーが寝ると、ゆっくりとベットへ横にした。

「もう大丈夫ですよ。 とりあえずの応急処置完了です。」

「よかった。」

ストレンジャーとアルドールはラプソディの言葉を聴き、胸をなでおろした。

これからの行動

テトラクリスタルアイランド南 アルドールの家

ブラベリーの応急処置を終え、ストレンジャー達はラプソディと共に休憩を取っていた。

「でもどうして、ブラベリーの鎖が？」

ラプソディはアルドールからの紅茶を飲みつつ、ストレンジャー達に理由を聞いた。

「ちょっと揉め事があったな。相手の一言で、ブラベリーが気絶してしまったんだ。」

「ブラベリーさんは挨拶をしに来ただけで、何も悪い事はしてません。」

ストレンジャーとアルドールは、簡単に先ほど起こった事を説明した。

「そうでしたか。それで、誰と接触した後に？」

ラプソディは一通り事情を聞くと、接触者を聞いた。

「イノセントっていう、白い兎の方です。でも、普通の兎ではなくて、素敵な羽を持ってました。」

アルドールはイノセントのことを簡単に説明し、ちょっと気になる点を言った。

「羽？」

「ええ、純白の羽を持っていました。」

ラプソディからの問いかけに、アルドールは答えた。

「白い兎に、純白の羽・・・」

「彼女は、大天使ガブリエルの末裔なんだ。」

ラブソディが考えていると、ストレンジャーが不意に口を割った。

「ストレンジャー・・・ 今なんて？」

アルドールは少々驚きつつ、ストレンジャーに聞き返した。

「イノセントは普通の兎じゃないって意味だ。」

ストレンジャーはそう言った。

「大天使ガブリエルを元にして作り出した、イノセント・ザ・ラビット。 彼女がココに来たんですね。」

ふと、ラブソディが呟くように二人に言った。

「マスターの守備範囲だったか。 だとすると、居場所も分かるのか？」

ストレンジャーはラブソディの守備範囲だと知り、ラブソディに問いかけた。

「彼女がいるとしたら、空の上の神の世界。 ですが、今の彼女は修行中の身。 今はこの世界の何処かにいるはずです。」

ラブソディは少々意味不明のことを言っていたが、最終的な意味を二人に告げた。

「とりあえず鎖の件もありますが、彼女を探さないといけません。 ブラベリーさんの心の傷を完全に消すには、彼女の言葉が必要です。」

ラブソディは再び寝てしまったブラベリーを見つつ、二人に言った。

「そうになると、今からイノセントさんを探すしかないわね。」

「そういうことだな。」

ストレンジャーとアルドールは依頼を聞き、了承した。

「とりあえず、ココじゃアルドールさんの寝泊りに関係します。 自分の店に運びましょう。」
「でも、どうやって運ぶんだ？ テイルスのメカは、ココには無いぜ？」

ストレンジャーはラブソディの言った事を聞き、手立てを聞いた。

「ココから店に行くには、海を渡るしかありません。 でも今のブラベリーさんは自力では飛べません。 ですから、グロウさんをお願いしたいんです。」

ラブソディは考えていた方法を、二人に伝えた。

「そうか。 グロウなら背中に乗せて運ぶ事が可能だな。」
「でも、グロウさんにこの事を説明しないと・・・」

アルドールはラブソディの言った方法に少し口を挟んだ。

「大丈夫です。 グロウさんは心の鼓動で何があってどうしているのかを知っています。 何も言わなくても平気ですよ。」
「そうでしたね。」

ラブソディからの説明を聞き、アルドールは納得した。

「ストレンジャー、グロウさんは今何処に？」
「今は地上にいる。 もう下に來てると思うぜ。」
「え？」

ストレンジャーはそう言うと、バルコニーの方を見た。
すると、

バサッ・・・

翼を羽ばたかせた音が聞こえた。

「ほらな。」

ストレンジャーは察していた通りに、下にグロウが来ている事に気づいた。

「では、行きましょうか。」

ラプソディはそう言うと、ブラベリーの事を抱えた。

ストレンジャーも同様にブラベリーの足を抱え、ラプソディの手伝いをした。

アルドールはそんな二人の前へ立ち、扉を開けて下へと降りて行った。

「ストレンジャー」

アルドール達が外へと出ると、島の大地に座って待っていたグロウが出迎えた。

「グロウ、来てくれてありがとう。」

ストレンジャーはグロウのそばへと行き、グロウにお礼を言った。

「ううん、気にしないで。 僕が必要なんでしょ？」

グロウは自分の下へとやってきたアルドール達を見つつ、そう言った。

「ああ、まあな。」

ストレンジャーは自分が背負っているブラベリーを見つつ、そう言った。

「グロウさん。 自分達をカフェまで運んでもらえませんか？ ブラベリーさんがちょっと危険な状態なんです。」

ラプソディはブラベリーを一回見た後、グロウを見つつお願いした。

「うん。 ブラベリーの鼓動が少し弱くなってる・・・ 危険なんだよね？ 早く乗って。」

グロウは先ほどから聞こえていた鼓動で何が起きているかを察し、ストレンジャー達に背中を向けつつ言った。

ストレンジャー達はすぐさま、グロウの背中に乗った。

「皆乗ったね？」

グロウはストレンジャー達が乗ったのを確認し、声をかけた。

「ああ、いいぜ。」

「お願いしますね、グロウさん。」

ラブソディはグロウの背中に寝かせたブラベリーを支えつつ、グロウに言った。

「じゃあ行くよ！ しっかりつかまってね。」

グロウはそう言うと、大きな翼を羽ばたかせ、空へと飛び上がった。

そして、ストレンジャー達を背中に乗せたまま、ラブソディのカフェへと向かって飛んで行った

。

二度目の危機

テトラクリスタルアイランド南 草原エリア

一方、ストレンジャー達が飛んで行った場所とは別の場所のエリアで、1つの影があった。その場所は、以前コレージが寝泊りに使っていた、少し大きめの岩の上だった。

『怖い・・・』

そこに居たのは、先ほどまでアルドールの家にいたイノセントだった。だがイノセントは先ほどまでの顔色とは別の色をしており、寒さとは別の感情で震えていた。

『なんだったの・・・ 今の・・・』

イノセントは先ほどの一時にやってきた1つの存在を思い出し、怖がっていた。大きな角を持ち、黒い大きな翼を持った、不気味な存在に。イノセントが考え事をしていると、

ガサガサッ

「!!!」

不意に、背後から物音がした。イノセントは手に花を持ちつつ立ち上がり、物音がした方を睨んだ。

「? 見知らぬ方ですね。 どうかしましたか?」

草むらを掻き分け、出てきたのはビリーブだった。手には数本の草が握られていた。

「い・・・ いえ・・・」

イノセントは先ほど出合った存在とは別の存在だと知り、少々安心しつつ言った。

「顔色悪いですね。 何処か悪いんですか？」

ビリーブはそんなイノセントを見つつ、そばへと寄った。

「わ、悪そうですか？」

イノセントは自分のそばへとやってきたビリーブを見つつ、そう言った。

「少し、何か怖い事があったみたいですね。」

ビリーブは少し心配しつつ、頷いた。

イノセントはそんなビリーブを、しばらく見ていた。

「よかったら、お茶でも飲みませんか？」

ビリーブはふと思いつき、イノセントに問いかけた。

「お茶ですか？」

イノセントはビリーブからの提案を聞き、問い返した。

「はい。 僕のお家ってわけじゃないんですが、居候しているお家があるんです。 どうですか？」

「・・・」

ビリーブからの提案に、イノセントはしばらく考えた。

「・・・いいですよ。」

「よかった。 じゃあ行きましょう。」

イノセントからの返事をもらうとビリーブは笑顔になり、イノセントの手を引いて家へと向かって行った。

軽く引っ張られつつ、イノセントはついて行った。

カフェ『Middle Garden』

一方、グロウの背中に乗ってカフェへとやってきたストレンジャー達。
島に到着すると、ストレンジャーはブラベリーを抱え、店内の休憩室へと向かって行った。
グロウは静かに移動し、休憩室の窓付近へ向かった。

「・・・とりあえず、これで一安心だな。」

ストレンジャーはブラベリーを布団の上に寝かせつつ言った。
ブラベリーはアルドールの家からずっと寝ており、今も軽い寝息を立てていた。

「後は、自分がしばらく面倒をみますので。」

「お願いします、マスター」

ラプソディがそう言うと、アルドールはそう言った。

「グロウも、ありがとうな。」

ストレンジャーは休憩室の窓を開けつつ、グロウにお礼を言った。

「ううん、気にしないで。 僕が出来る事があったら、いつでも言ってね。」

「ああ、頼むぜ。」

ストレンジャーからお礼を言われたグロウはそう言い、翼を羽ばたかせつつ空へと飛んで行った。
。

グロウを見送ると、ストレンジャーは窓を閉めた。

「ブラベリーは、どれくらいで元気になるんだ？」

1回休憩室を後にした3人は、店内でドリンクを飲みつつ話をしていた。

「あまり目処は立っていませんが、数日間で鎖は治ると思いますよ。 元気になるかは分かりませんが・・・」

ストレンジャーに問いかけられ、ラブソディは説明した。

「どうしたら、前までのブラベリーのようになれるですか？」

ラブソディの言った事に、アルドールは問いかけた。

「やっぱり自然回復では治らない心は、イノセントさんからの声がないと。」

「・・・やっぱり、イノセントを探す必要があるか。」

ストレンジャーは予想してた通りの答えが返ってくると、そう言った。

「とりあえず、ブラベリーさんはこちらが見ますので、ストレンジャー君達はイノセントさんを探して、説得してください。」

ラブソディはこれからする事が決まると、担当を決めた。

「わかった。 承諾するかはわからないが、探すぜ。」

「私も。」

「ありがとうございます。 お願いしますね、2人とも。」

2人はそう言うと、ラブソディは再度お礼を言いつつ言った。

『・・・う、ううん・・・』

そんな3人の会話が聞こえてくると、ブラベリーは軽く目を覚ました。

『・・・まだ・・・ 眠い・・・』

ブラベリーはそう思いつつ、再び寝てしまった。

テトラクリスタルアイランド 砂浜エリア

「どうぞ。」

一方こちらは、ストレンジャーの家へと来たビリーブとイノセント
ビリーブはポットからカップへ緑茶を注ぎ、イノセントに差し出した。

「あ、ありがとうございます。」

イノセントは軽くお礼をいい、緑茶を飲んだ。

「・・・おいしい。」

「よかった。喜んでもらえて。」

ビリーブはイノセントからの返事を聞き、嬉しそうにそう言いつつ向かい側のイスへと付いた。

「あ、ところでまだお名前を伺ってませんでしたよね。 聞いても良いですか？」

ビリーブは緑茶を飲みつつ、イノセントに問いかけた。

「あ、はい。 私は『イノセント・ザ・ラビット』といます。」

「イノセントさんですね。 僕は『ビリーブ・ザ・セレモニー』といます。 よろしくね。」

ビリーブは名前を聞くと、笑顔でイノセントに言った。

『変わった子。 いつでも笑顔でいるのが好きなのね・・・』

イノセントは差し出された緑茶を飲みつつ、ビリーブを見ていた。

ビリーブは少し緑茶熱いのか、両手でカップを抑えつつ、息を吹きつつ冷まして飲んでいて。
テーブルの高さが若干高いのか、首から下はテーブルの下。 両手はテーブルの上のため前かがみで飲んでおり、年相応の可愛らしさで飲んでいて。

それを向かい側の席から見ているイノセントは、ビリーブを見つつちょっと苦笑していた。

「? どうかしましたか？」

イノセントが笑っていると、ビリーブは問いかけた。

「いいえ、なんでもありませんよ。 フフフ。」

イノセントはそう言いつつ、再び笑っていた。
そんなティータイムを送っていると、

コンコン・・・

家の扉がノックされる音がした。

「はい。」

ビリーブは席から降り、扉へ向かって行き、扉を開けた。

「ハイ、ビリーブ。」

扉の先にはホネスティがおり、ビリーブに笑顔で挨拶をした。

「こんにちはホネスティさん。 どうかしましたか？」

「ちょっとストレンジャーに用があつてね。 いる？」

ホネスティは用件を簡単に言いつつ、家の中を見た。

「いいえ、今は留守にしていますよ。 しばらくしたら帰ってくると思います。」

「そっかー 残念。・・・あれ？ お客様？」

ホネスティは家の中へ入りつつ、ビリーブに言った。

「あ、はい。 僕が招待したんです。 イノセントさんですよ。」

「イノセント？ 始めまして。」

ホネスティはイノセントのそばへと行きつつ、声をかけた。

「こんにちは。 えっと・・・」

「ホネスティ・カメラアよ。」

「ホネスティさん。」

声をかけられたイノセントは、返事をした。

すると、後方で物音が

ガタガタッ

「？」

ビリーブは物音がした方を見た。

すると、玄関には見知らぬ人物が立っていた。

「貴方達、誰ですか？」

「！！ 貴方達！！」

ビリーブが警戒しつつそう言うと、ホネスティは声を上げた。

「おや、お邪魔虫がいるな。 あの時同様に。」

「面倒ったらありゃしないわ。」

2人組みはそう言いつつ、ビリーブとホネスティを見た。

「誰ですか？」

「アリス様を以前襲った奴らよ。 何か用かしら？」

ビリーブはホネスティに問いかけると、手にスティックを召喚しつつ返事が返ってきた。

「要するに、敵って事ですね。」

ビリーブはそう言うと、手に破魔矢を召喚した。

「何の御用ですか？ 御二人方」

ビリーブは相手を警戒しつつ、問いかけた。

「名乗るほどでもない。 ちょっと野暮用さ。」

「ちょっとそこの兎。 ご同行願えるかしら？」

2人はそう言うと、イノセントを見た。

「わ、私ですか？」

イノセントは急に名前を呼ばれ、驚きつつ言った。

「ああ、ちょっと俺達と来てくれないか？」

敵の1人は、イノセントに問いかけた。

「ええっと・・・」

「ダメよ、イノセント。」

イノセントは迷っていると、ホネスティは言った。

「アイツ等は敵よ。 行っちゃダメ。」

「そ、そうですね。 ゴメンなさい。」

ホネスティにそう言われ、イノセントは相手に謝った。

「やっぱりな。 一筋縄では行かないか。」

「では、力ずくで行くわよ！！」

2人はそう言うと、イノセントに襲い掛かった。

「キャア！！」

「そうは行かせません！」

ビリーブはそう言うと、相手を攻撃した。
敵はビリーブの攻撃を避け、後方へ着地した。

「チッ、やっぱり邪魔をするか。」

「当然よ。彼女にどんな能力があるかは知らないけど、手出しはさせないわ。」

ホネスティはイノセントの前に立ち、守る体制へ

「どうですか？ 僕達でも戦えるだけの力はありますよ。」

ビリーブも同様にイノセントの前へと立った。

「みたいだが、」

タッ！

「！！」 バタッ・・・

「所詮は子供。俺達には敵わないさ。」

敵はビリーブ達に手刀をし、気絶させてしまった。

「ビリーブさん！ ホネスティさん！」

イノセントは2人のそばへ行き、意識を確かめた。
だが2人とも気絶しており、しばらく起きそうに無かった。

「まったく、このリスには随分と世話になったわね。」

敵の1人はそう言いつつ、足でホネスティを軽く蹴りつつ言った。

「ここで消すのも悪くないけど、今はそれじゃないのよね。」

「そう言うことだ。」

敵はそう言うと、イノセントの背後に廻った。

「！」

「すまないが、しばらく大人しくしててもらおうぞ。」

そう言うと、敵はイノセントをロープで拘束し、口にさるぐつわを噛ませた。

「――！！」

「さてと、運ぶかな。」

敵はそう言うと、少々暴れるイノセントを抱え、外へと出て行った。

『イノ・セントさん……』

ビリーブは少々薄れていく意識の中、イノセントを見ているしか出来なかった。

さらわれたイノセント

ビーイングキャッスル

テトラクリスタルアイランドで一騒動起こっている頃。

ビーイングキャッスルのとある一室に人影が。

「新しい部屋をもらったとはいえ、まだちょっと落ち着かないな。」

新しく住居者として住んでいるプロミスは、自分用に用意された部屋で少しソワソワしていた。

とはいえ、まだ自室に慣れていない様子で、落ち着いて座っている事が出来ない様子。

「少しは落ち着けよ、プロミス。」

プロミスがソワソワしていると、部屋の扉が開き、ホープが入ってきた。

「ホープ。　・・・やっぱりちょっとな。　こういう生活は始めてだから、かな。」

プロミスは頬を軽く掻きつつ、ホープに言った。

「それも暮らし上の慣れてやつか。　ま、自室で歩き回っててもしゃあないだろ。」

「・・・確かに。」

プロミスはホープにそう言われると自室を歩き回るのを止め、イスへ座った。

「でも、アリス様が設計しただけはあるな。　少し広めでいい部屋だな。」

ホープも同様にイスへと座り、部屋を見渡した。

部屋は天井が高めの作りになっており、部屋は円柱形をした部屋になっていた。

家具は大体ホープと同じように必要最低限の物が置かれており、そこまで賑やかな部屋では無かった。

ホープの部屋と違う部分は、家具の耐熱温度が高い事である。

『・・・！！』 「ん？」

プロミスはそんなホープを見ていると、不意に気配を感じ、窓辺へ。

「どうした？ プロミス。」

ホープはそんなプロミスを見て、同様に窓辺へ向かった。

「・・・ちょっとな。何か嫌な気配がした。」

プロミスは外を見つつ、そう言った。

だが、外には誰もいない。

「気のせい・・・か。」

プロミスは一通り見終わると、イスへと戻ろうとした。

だが、

「？ おい、プロミス。あれって・・・」

不意にホープは、プロミスに声をかけた。

プロミスは呼ばれると、再び窓辺へ来た。

ホープが見ている先は、少し遠くにあるテトラクリスタルアイランドだった。

「あれ、誰か縛られてないか？」

ホープは島を見つつ、人影を指差した。

「・・・本当だ・・・まさか・・・」

プロミスは少し考えていた。

「拘束って所だな。助けに行くか？」

ホープは大体予想が付くような答えをいい、プロミスに同意を求めた。

「相手が困っているか確かめに行かないと行けないからな、行ってくるぜ。」
「さて、俺も行く。」

部屋を出て行こうとしたプロミスに、ホープは声をかけた。

「だが、俺1人の行動につき合わせるわけには・・・」
「気にすんなよ。俺も行きたいだけだからさ。」

プロミスが言いかけた事に対してホープはそういい、プロミスのそばへと来た。

「・・・ わかった。」

プロミスは少し考え、承諾した。

「よし、行こうぜ。 アリス様には俺から行っておくから。」
「頼む。 先に行ってるぜ。」

ホープがそう言うと、プロミスは1人窓を開け、空へと飛び出した。
プロミスが無事飛んでいくの確認し、ホープは部屋を出て行った。

カフェ『Middle Garden』

一方、こちらは休憩室で寝ていたブラベリー
今は軽く目を覚まし、布団に寝たまま窓を見ていた。

『・・・』

外の風景を見つつ『自分は何をしていたんだろう』と考えていた。
ブラベリーは先ほどまでの記憶はあまり覚えておらず、少々ぼんやりしていた。

ラプソディが一時的に記憶を消したため、今は覚えてないのだ。

『あれ・・・』

ブラベリーが外を見ていると、外に人影が写った。

それは、黒いローブを纏った2人組みに、純白のワンピースを纏った兎。

「彼女は、」

ブラベリーは体を起こし、窓を開けて外を見た。

外には2人が何処かへ向かっている様子で空を飛んでおり、イノセントはロープでグルグル巻きにされており身動きが取れない状態になっていた。

「助け・・・無いと・・・」

ブラベリーはまだぼんやりする頭をを起こしつつ、空へと飛び出し、後を追いかけて行った。

ブラベリーが出てから数分後。

コンコンッ

休憩室の扉がノックされた。

「ブラベリーさん、入りますよ。」

アルドールは声をかけつつ、扉を開けた。

だが休憩室には誰もおらず、窓が開け放たれていた。

「！！ ブラベリーさんがいない！！ マスター！！」

アルドールは少々焦りつつ、店内へ引き返して行った。

テトラクリスタルアイランド

ラプソディのカフェを早めに出たストレンジャーは、1人テトラクリスタルアイランドへ向けて飛んでいた。

時刻はおやつ時。 まだまだ明るい時間帯だった。

ストレンジャーは家のそばの砂浜に着地すると、家へと向かって行った。だが、

『ん？ 扉が開いてる・・・』

ストレンジャーが家に向かうと、すでにストレンジャーの家の扉は開いていたのだ。中からは蛍光灯の光が漏れていた。

『まさか！！』

ストレンジャーは嫌な予感がし、急いで家の中へと入って行った。

すると、予感の的中しており、リビングにはビリーブとホネスティがうつ伏せの状態に倒れていた。

「おい、ビリーブ！ ホネスティ！ しっかりしろ！」

ストレンジャーはビリーブを抱え、体を軽くゆすりつつ声をかけた。

「う・・・うう・・・ん。」

すると、ビリーブはゆっくりと目を開けた。

「ストレンジャーさん・・・」

「ビリーブ、何があったんだ？」

ストレンジャーはビリーブの顔を見つつ、問いかけた。

「イノ・セントさんが・・・連れて・行かれてしまいました・・・」

ビリーブは途切れ途切れにストレンジャーに内容を伝えた。

「イノセントが！？」

「ううん・・・」

ストレンジャーが驚いていると、後方から声が。
振り向くと、ホネスティがゆっくりと体を起こしていた。

「ホネスティ、大丈夫か？」

「え、ええ・・・ 油断したわ・・・」

ホネスティは頑張っで自力で立ち上がろうとしていたが、少々体が痛む様子で立てそうに無かった。

「一体何があったんだ？」

ストレンジャーは先ほどビリーブに問いかけた質問を、同じくホネスティに問いかけた。

「イノセントが、アリス様の城を襲った奴らに連れて行かれたの・・・」

「僕達で守ろうとしたんですが、守れませんでした・・・」

ビリーブはストレンジャーに抱えられたまま、そう言った。

「イノセントが、連れて行かれた。 何処へ行ったかわかるか？」

ストレンジャーは少し考えた後、2人に問いかけた。

「ゴメンなさい、気絶してて。」

「分からないの・・・」

「そうか、でも頑張ったんだろ。 ありがとう2人共。」

ストレンジャーは一通り話を聞くと移動し、ビリーブをソファの上に寝かせた。

「後は俺達が何とかする。 とりあえず2人は休んでてくれ。」

ホネスティも同様に運びつつ、ストレンジャーは言った。

「ゴメンなさい、ストレンジャーさん。」

「気にすんな。」

ビリーブにそう言われ、ストレンジャーは励ましつつそう言った。

「守ろうとしただけでも上等だ。 良く頑張ったよ。」

ストレンジャーはビリーブのそばに行き、頭を軽く撫でた。

「でも、気をつけて。 相手は手ごわいわ。」

「ああ、わかった。」

ホネスティにそう言われ、ストレンジャーは家を後にした。

『さて、何処に行ったか・・・ だな・・・』

ストレンジャーは外へ出たあと、目的地を何処へするか考えていた。

『とりあえず、この島以外の場所だとしたら、ビーイングキャッスルか・・・』

「ストレンジャー！！」

ストレンジャーが考えていると、上空からアルドールがやってきた。

「アルドール。 どうしたんだ？」

アルドールは島に降り立つと、ストレンジャーの下へ。

「ブラベリーさんが、いないの！！」

「なんだって！？」

アルドールにそう言われると、ストレンジャーは驚きを隠せない様子でそう言った。

「私が休憩室に行ったら、布団が物家の殻で・・・ 窓から外に出たみたいなの。」

アルドールは先ほどまでの状態を説明した。

「どうして、まだ外出できる体じゃないのに・・・」

「ストレンジャー」

ストレンジャーとアルドールが考えていると、上空から再び声をかけられた。

するとそこには、ラッパに座ったホープの姿が。

「ホープ、どうしたんだ？」

「ストレンジャー、プロミスを見なかったか？」

ホープはラッパに座ったまま高度を下げ、ストレンジャー達のそばに行きつつ問いかけた。

「プロミス？・・・いや、見てないが・・・」

「プロミスさんが、どうかしたの？」

アルドールはストレンジャーに変わって問いかけた。

「ああ。 テトラクリスタルアイランドの、ちょうどこの辺りで何処かに向かって飛んでいく人影を見てな、プロミスが先にその正体を確かめに行ったんだ。 それっきり俺はぐれちまって。」

」

「ここから、外へ出て行ったのか？」

「そうだ。」

ホープから話を聞き、ストレンジャーは話を再確認した。

「って事は、イノセントを誘拐したのはそいつらかもしれない・・・」

ストレンジャーは先ほどまでに起こった事を推測し、1つの結論に至った。

「イノセントさんが？」

「ああ、ビリーブとホネスティが俺の家に来た時、敵に襲われたらしいんだ。その後イノセントは誘拐された。それをプロミスが見て追跡を開始。おそらくブラベリーもそれを見たんだろ。」

「そうなるよ、話が一通りまとまるな。」

ホープは話を一通り聞き終わると、結論を言った。

「じゃあ、イノセントさんをさらった奴らを、プロミスさんとブラベリーさんが追いかけてるって事ね。」

「そう言うことだな。」

アルドールにそう言われ、ストレンジャーは言った。

「とりあえず、俺達には追いかけるすべが無い。1回マスターのいるカフェに行こう。またそこから道が出来るかもしれないからな。」

ストレンジャーは、1回道が閉ざされた事を悟り、アルドールとホープに言った。

「確かにそうだな。闇雲に行動しても見つかるか分からないからな。」

「それにマスターの場所なら、何かしらの情報が来るかもしれないしね。」

ホープとアルドールはストレンジャーに言われた事を聞き、同意した。

「よし、早速行こう。」

話はまとめ、3人はラプソディのいるカフェへと向かって行った。

『プロミス、ブラベリー イノセントを頼むぜ。』

ストレンジャーは心の中でそう言いつつ、飛んで行った。

変わった思考

ロレリネスアイランド付近 海上

バサッ バサッ・・・

テトラクリスタルアイランドから離れ、しばらく行った場所のとある海上。
そこでは1人、少々ふら付きつつ空を飛ぶブラベリーの姿があった。

『・・・ 苦しい・・・』

時刻は夕方前のまだ明るい時間帯。

辺りは明るく追っている敵を見失う事は無いが、ブラベリーの体力は限界に近づいていた。
中々安定した進路を飛ぶ事が出来ず、右へ左へフラフラ。 頼りない飛び方をしていた。
病み上がりなので、無理も無い。

『・・・見失う、ダメ・・・』

ブラベリーは少し諦めてかけてはいたが、頭を横へ何度も振り、意識を戻していた。

連れ去られている人物には見覚えがあった。

ブラベリーの頭の中にはおぼろげにしていた記憶がしっかりと直っており、何が起こったのかを
ブラベリーは知っていた。

イノセントにきつい言葉を言われ、気絶した事。

自分が消えかけ、ラプソディに助けられた事。

ブラベリーにとってこの行動の結末は、大体見えていた。

だがどんな結末が来ようとも、連れ去られている存在を見殺しには出来ず、ブラベリーは飛び出してきたのだ。

『・・・ダ、メ・・・』

ブラベリーは翼を動かす体力を全て使い果たし、少し空に止まったと思うと、体は重力に従い海
に向かって落ちていった。

目の前には不思議な光景が広がっており、空と海の位置が逆転していた。

ブラベリーが海に落ちる。 その時、

ガシッ！

「だ、大丈夫か！？ ブラベリー」

ブラベリーの体は急に支えられ、ギリギリの所で誰かに助けられた。
ゆっくりと顔を上げ、ブラベリーは誰が助けたのかを確認した。
そこには炎で出来た翼が動いており、支える両腕は温かかった。

「プロ・ミス？」

助けた人物を見ると、そこにはプロミスがいた。
プロミスは翼を動かしつつ、ブラベリーを支えていた。

「お前何してるんだ？ その様子だと、病み上がりだな・・・」

プロミスは抱えているブラベリーを見つつ、状態を大体察した。

「イノ、セントが・・・」

「・・・さっきの奴だな。 お前それを追ってたのか、ったく。 何やってんだか。」

プロミスは少々呆れつつ、追いかけていた影を見た。
すでに影は遠くに飛んでおり、無人島へ降りたのを見届けた。

「助け、る・・・」

プロミスが影を見ていると、ブラベリーが腕から降りようとしていた。

「あ、バカ。 お前そんな体力で飛べるわけねえだろ。 落ちる気か？」

「・・・でも、助ける。 イノセント・・・」

ブラベリーは降りる動作を止め、敵が飛んで行った方向を見つつ呟いた。

「・・・ハア、仕方ないか。」

プロミスはブラベリーの呟いた言葉を聞き、説得を諦めた。

「・・・このまま運んでやるよ。 動くなよ。」

「ありが、とう・・・」

するとプロミスはブラベリーを抱えなおし、降り立った無人島へ向けて飛んで行った。
ブラベリーは感謝しつつ、素直に運ばれて行った。

『優しい・・・』

ブラベリーは敵対していたあの頃のプロミスを思い出しつつ、今のプロミスを見て嬉しそうにしていた。

自分を消そうとしていた彼はもういない。 目の前にいる彼は自分を消そうとせず、むしろ手助けしてくれる優しい存在。

その事に嬉しく思っていた。

「・・・？ なんだ？」

プロミスは不意に視線を感じ、ブラベリーに問いかけた。

「なんでも、ない。」

ブラベリーはそう言いつつ、ずっとプロミスを見ていた。

『・・・変な奴。 俺と敵対していた時の事を忘れたのか？』

プロミスは少々呆れつつ、そんなブラベリーを運んで飛んで行った。

ロレリネスアイランド

一方、イノセントを連れ去った2人組みはと言うと、

「ようやく静かなところに来れたわね。」

「まあな。・・・さてと、どう料理してやろうか。」

会話をしつつ、島に最近立てられた塔の中に進入していた。

ここはホープ達に破れ、飛ばされた先にあった小さな無人島。

2人組は体力回復等のため、しばらくこの島を利用していたのだ。

その時組織に連絡を取っていたが、ある時期を迎えてからは連絡が取れなくなっていた。

そう、プロミスにやられた連中を除くと、残っているグループのメンツはこの2人だけとなっていたのだ。

それからしばらくして、強力な手段を探し出し、イノセントを利用する事を決めたのだ。

イノセントが仕える、大天使の力を。

「さてと。付いたわ。」

2人組みは塔をしばらく登り、最上階へと到着した。

「痛ッ・・・」

イノセントを少し乱暴に床へ投げ捨て、敵は言った。

「さて、お前にはしばらく時間をくれてやる。死ぬまでの最後の時間さ。」

「私達ちょっと休憩してくるから、その間最後の時間、せいぜいあがいて頂戴ね。オーッホッホッホ！！」

2人はそう言うのと、部屋の扉を閉め、下へと降りて行った。

1人残されたイノセントは、ロープでグルグル巻きにされた状態のまま起き上がり、その場に正座をした。

部屋にあるひとつの窓からは、夕日が見えた。

『私・・・ここで死ぬのね・・・』

イノセントは顔を俯かせ、最後の時間を味わっていた。

そして、涙を流した。

『まだ修行中の身なのに・・・私が身勝手に下界へ降りたばかりに、こんな事に・・・』

イノセントは涙を流しつつ、心の中で悔いていた。

「私・・・どうなるのかな・・・助けて・・・」

イノセントは震える声で、そう呟いた。

一方、

「さてと、着いたぜ。」

島へと到着し、ブラベリーをゆっくり地面へ立たせたプロミス

ブラベリーは少々フラフラしつつも立ち上がり、辺りを見た。

島は無人島に相応しいといえるぐらいの森が広がっており、何処へ連れて行かれたのかなど検討がつかない状態だった。

プロミスは辺りの砂地を確認し、足跡を探した。

「・・・さすがに足跡は残さねえか。プロなだけはあるな。」

一通り砂浜を見た後、プロミスは立ち上がった。

辺りには殺気は無く、場所の特定も出来そうに無かった。

「探すには時間がかかりそうだな。・・・ブラベリー？」

プロミスはブラベリーの元へと戻ると、少々違和感を感じた。
ブラベリーは少々おぼろげな目を開け、辺りをぼんやりと見ていた。
不意に、

「・・・こっち・・・」

ブラベリーはふと呟くと、前へ向かって歩き始めた。

「お、おいブラベリー。」

プロミスは歩き出したブラベリーの後を追いかけた。

「どうしたんだ？ 急に。」

プロミスはゆっくりと歩くブラベリーの横を歩きつつ、問いかけた。

「・・・こっち、いる・・・」
「分かるのか？」

プロミスが問いかけると、ブラベリーは頷き、再び歩きだした。
どうやら目的地が分かる様子だった。

『・・・なんで、わかるんだ？』

プロミスは少々怪しいと思いつつも、ブラベリーの後を付いて行った。

しばらくすると、前は邪魔な枯れ葉が山住にされており、大きな大木が横になっていた。
ブラベリーは歩くのを止め、飛ぼうとして翼を動かした。
だが先ほど同様体力はあまり残っておらず、飛べるだけの体力は残されていなかった。
そして、体は傾き、前のめりに倒れそうになった。

「お、おい！」

プロミスは再びブラベリーを支えた。

ブラベリーは支えられると、再びゆっくりと立った。

「この先に、いるのか？」

プロミスが問いかけると、ブラベリーは頷いた。

「しょうがない。 ちょっと待ってろ。」

プロミスはそう言うと、手に炎を召喚し、邪魔な枯れ葉と大木を丸ごと燃やし尽くした。

「これでいいか？」

邪魔な大木等を全て燃やし、プロミスは燃えカスを退かしつつブラベリーに言った。

ブラベリーは頷くと、再び歩き出した。

『よくわからないが、だまされたと思って着いて行くか・・・』

プロミスはそう決めると、再びブラベリーの後ろへ着き、同じ歩調で歩いて行った。

それからプロミスはブラベリーの体調を気遣いつつ後ろを歩き、アシストをしていた。倒れそうになったら後ろから支え、歩行に邪魔な障害物が出た場合はすぐさま退かした。ブラベリーはゆっくりと歩きつつ、少しずつ体力を回復させて行った。

そして、1つの塔へ辿り着いた。

「ブラベリー、ここか？」

プロミスは塔を確認しつつ、ブラベリーに問いかけた。

塔の外装はレンガで固められており、レンガに相応しい土気色をしていた。

高さは結構あるものの、ジャングルの樹からはみ出ない程度の高さに作られていた。

ブラベリーは塔の上を見た後、入り口に向かって歩いて行った。
入り口付近には特に罨等は無く、塔はすんなりとブラベリーの進入を許した。

『あの様子だと、身の危険は承知の上か・・・』

プロミスは危ない足取りで塔の階段を登っていくブラベリーを見つつ、後を追いかけた。
ゆっくりと2人は塔の階段を登っていき、最上階を目指して進んでいた。
入り口同様に罨は無く、プロミスの心配はブラベリーの体の調子だけになった。
塔には特に部屋への扉は無く、階段だけが続いていた。

『部屋が無いって事は、最上階にいるのか・・・』

プロミスは辺りを確認しつつ進み、最上階を目指した。
ブラベリーは島へ到着した時よりは安定した足取りで塔を登っていた。
だが、まだまだ体力は足りない様子で、息切れをしていた。

「ハア・・・ ハア・・・」

ブラベリーは1回歩くのを止め、階段の一段に座り休憩した。
プロミスも、同様に歩くのを一時止め、ブラベリーの顔色を確認した。

「大丈夫か？」

プロミスはブラベリーの顔を見つつ、問いかけた。

「大、丈夫・・・」

ブラベリーはそう言うと、顔を上に上げつつ休憩していた。

『それにしても、俺は何をしてるんだろう・・・』

ふと、プロミスはそんな事を考えつつ、ブラベリーの横に座った。

以前まで消そうとしていた存在がいたのに。 憎き存在を消そうとしていたのに。
他の誰の存在もいらないと考えていた自分だったのに。

今はそんな存在が隣に座っていて、自分はその存在のアシストをしている。

『考えが、変わったな・・・』

プロミスはそんな事を考えつつ、隣に座っているブラベリーを見た。
顔色もだいぶ良くなり、自力で少しは行動できるくらいまで回復している様子だった。
体調も良くなっており、短距離なら自力で飛ぶことも可能と思われた。
息切れもだいぶ少なくなり、再び歩き出しそうだった。

「・・・行こう。」

ブラベリーはそう言うと、再び階段を登り出した。

『・・・ま、別にいいよな。 今まで自分が決めた行動をしなくて、新しい行動をしてもさ。』

プロミスは少し顔色を明るくしつつ、ブラベリーの後を付いて行った。

しばらく上る事数十分。

2人は塔の最上階に到着した。
最上階は広いホールの様な状態となっており、ホールの中の一番遠い場所に1つの扉があった。

「・・・あそこ、いる。」

「あの部屋か。」

ブラベリーは部屋を指差し、プロミスは目的地に着いた事を察した。
だが、簡単に部屋には入れそうに無かった。

「おや、珍しいお客だな。 こんな所に。」

「それに、以前似たような姿を見た覚えがあるわね。」

プロミス達のいるホールの両脇の窓から、2人組みが姿を現しつつ言った。

「ここに何の用か。聞くまでも無いか。」

2人組みはホール内に入りつつ、プロミス達に言った。

「・・・イノセント、返して。」

ブラベリーは少し前に出ると、2人組みに言った。

「それは無理な要望ね。あの子には消えてもらって、力を頂かなければいけないのだから。」

「そう言うことだな。返してほしければ、俺達を倒す事だな。」

「もっとも、その体じゃ戦う事が難しそうだけれど。」

2人組みはそう言うと、それぞれ武器を手にした。

「ブラベリー、お前は全力であの部屋に向かえ。俺はお前の援護しつつこいつらと戦う。」

「？」

プロミスは手に炎の槍を召喚しつつ、ブラベリーに言った。

「・・・でも、」

「あいつらも言ってたが、お前の体調は万全じゃない。戦う事は難しいからな。俺なら平気だ、あいつらぐらい片付けられる。」

プロミスはブラベリーの顔を見つつ、そう言った。

「・・・わかった。」

ブラベリーはそう言うと、手に鎖を召喚した。

「行くぜ！！」

戦いが始まった。

ロネリネスアイランド 塔最上階

イノセントを奪還すべく、2人組みの敵の元へとやってきたブラベリーとプロミス。それぞれが持つ武器を手にし、戦いが始まった。

「行くぜ！」

プロミスは両手用の槍を手にし、相手に向かって行った。左手には炎の塊が渦巻いており、すでに発射する態勢になっていた。

「・・・行く。」

ブラベリーは召喚した大量の鎖をホール中に絡ませ、敵の移動を制限した。そして、部屋に向かって全力で直進して行った。

「来い！」

「華麗に消してあげるわ！」

2人組みは部屋に張り巡らされた鎖を退かしつつ、2人に向かって攻撃した。プロミスは攻撃を回避しつつ、ブラベリーの援護に廻った。ブラベリーは鎖を両手で掴み、ジャングルにいるターザンのように華麗に移動しつつ部屋へと向かって行った。

「チッ、灰色は部屋が目当てだ！ アイツを倒せ！」

「薔薇達よ、やっておしまい！」

敵は張り巡らされた鎖に苦戦しつつ、ブラベリーに攻撃した。

「おっと、させないぜ。 火竜！」

プロミスは炎を龍のように形作り、ブラベリーに向かっている薔薇を全て燃やし尽くした。

「・・・破壊！」

その隙にブラベリーは部屋の入り口へと到着し、扉を鎖で壊した。

ブラベリーが部屋へ入ると、プロミスは部屋の前へと移動し、壊された扉の部分に炎で壁を作った。

「さて、俺を倒さない限りこの中には入れないぜ。 2人まとめてかかって来い！」

プロミスはそう言いつつ手招きをし、2人を挑発した。

「小さい奴が調子に乗るな！」

「アンタなんかすぐさま片付けてア・ゲ・ル！」

敵は普通に挑発に乗り、プロミスに向かって行った。

バキッ！ ガラガラガラ・・・

「な、何？」

部屋に1人いたイノセントは、急に壊された扉を見つつ驚いていた。

扉は破壊され、少々砂埃が立っていた。

砂埃から1つの影がこちらに向かってきた。

「・・・大、丈夫。」

ブラベリーは脅かさないようにゆっくりとイノセントに近づき、少し距離を置いた場所で止まった。

「!!!」

イノセントはブラベリーを見ると、あの時同様に驚き、震えていた。

「な、何なのよ！ 貴方！ 私に何のようなの！？」

イノセントは急いでロープを解こうとしつつ、ブラベリーに問いかけた。
もちろんロープはきつく縛っているため、簡単には解けない。

「・・・君、助ける。 ため。」

ブラベリーはその場に立ったまま、イノセントに言った。
もちろん、信じてもらえないのは承知の上だった。

「嘘！ そんな事を言っても信じないわ！ 貴方は悪魔じゃない！！」

イノセントは今の状態のまま立ち上がり言うと、脱出出来そうな場所を探した。
だが窓までの距離は高く、破壊された扉には炎が壁になっており、道は無かった。

「・・・自分、悪魔じゃ、ない。」

「悪魔は皆そう言うわ。 そうだなんていわないわ。」

イノセントはブラベリーを警戒しつつ対立していた。
ブラベリーはどうしたら信じてもらえるか、考えていた。
だがいい方法が見つからず、困っていた。 すると、

『・・・そうだ。』

ブラベリーはとりあえずしておくべき行動が1つ浮かび、手に鎖を召喚した。
その鎖は先ほどまでの鎖とは少し違い、先端が鋭くなっていた。

「な、何をするき！？」

イノセントはブラベリーが手にした鎖を見て、身構えた。

「・・・動かない。」

「！！」

イノセントは接近してくる鎖を見て目を閉じた。

スパッ！

すると鎖は、イノセントを縛るロープを切った。
切られたロープは、イノセントの足元に落ちた。

「え・・・」

イノセントはブラベリーに殺されると思ったが、予想外の行動に驚いていた。

「クッ！」

一方、ホール内で戦っているプロミスはというと
1対2の状況下の中で、懸命に戦っていた。
体には傷があり、相手の攻撃を受けていた事が見て取れる。

「あら、最初の強がりはどうしたのかしら？」

2人組みの片方はそう言いつつ、薔薇を回していた。

「もう終わりか？ 最初に手合わせした子供らよりは確かに強いが、さすがに限界だろ。」

もう片方はそう言いつつ、剣を構えなおしていた。

「・・・フッ。俺がコレくらいの実力だと思ってもらっちゃあ困るな。」
「何？」

プロミスはそう言いつつ、持っていた槍を消した。

「あら、とうとう頭までおかしくなっちゃったかしら？」

「違うぜ。」

敵が言った言葉を否定しつつ、プロミスは両手に炎を召喚した。

「俺はお前達と似たような存在だ。 だからこそどんなに数が多くても、俺は勝てる。」

「何を戯言を、」

「この炎の前では、存在全てが燃え消えるんだよ！！」

プロミスはそう言うと、部屋全体に炎をめぐらせた。

放たれた炎達はホール内を駆け巡り、あっという間に部屋全体を多い尽くした。

そして、敵に向かって前方向から飛び掛った。

「あらやだ！」

「何ッ！ **グアアアアアアア！！！！**」

敵の1人はこの攻撃に避けられず食らい、炎の餌食となった。

炎は敵を回りから囲むと球体になった。

その場から炎が無くなると、その場所には敵の亡骸すら残っていなかった。

「ターゲット消滅。 次はお前だ！」

プロミスはそう言うと、敵を指差し炎がその場所に向かって飛び掛った。

「甘いわ。 逃げれば勝ちよ！」

敵はそう言うと、炎を避けつつ窓があった場所から外へと飛び出した。

窓に張ってあった炎は自ら受けたものの、敵は外へと脱出した。

「フッフ、バイバ〜イ！」

敵はプロミスに向かって言い放つと、姿を消した。

「・・・チッ。 逃がしたか。」

プロミスはそう言うと、放った炎達を消した。

炎がホール無いから消えると、部屋には焼け焦げた後が少し残っていた。

その場所は、敵が消えた場所だった。

「コレが俺の必殺技『プロミネンス』さ。 この炎を食らって立っているやつは、俺以外にはいない。俺と似た存在ならなおさらな。」

プロミスは燃やした敵に言いかけるように言うと、ブラベリーが入って行った部屋に向かって行った。

「何で・・・」

「・・・君を、助ける。 それだけ・・・」

ブラベリーはそう言うと、手元に戻ってきた鎖を消した。

「・・・自分、ブラベリー・ザ・メテオリーツ。 魔よけ、一種、ガーゴイル・・・」

「ガーゴイル。 魔よけの一種。」

イノセントは言った言葉を聞き、ブラベリーを見た。

確かにブラベリーは黒い翼を持っていたが、体には悪魔らしき装飾品は無く、布地にサンダルというシンプルなスタイルをしていた。

移動の際に切れたと思われる肩の布地からは、赤い鎖が見えていた。

「ガーゴイルって言う証拠は。」

「石化・・・」

ブラベリーはそう言うと、イノセントに左手を見せつつ石化させた。

左手は元の灰色から薄い灰色に変わり、石になっていた。

「石・・・」

「・・・君、自由。 逃げて。」

ブラベリーはそう言うと、後ろに数歩下がった。

イノセントはそんなブラベリーを見つつ、どうしようか考えていた。

『・ ・ ・ どうしよう。 私の誤解だった ・ ・ ・ 誤らないと。』

「あの。」

「消えなさい！」

「！！ 危ない！」

イノセントが誤ろうとすると、後方から声がした。

ブラベリーはその場から走りイノセントに向かって飛んで行った。

「キャア！！」

イノセントの驚きの声と共に、

ドスッ！

「クッ ・ ・ ・ 」

嫌な音がイノセントの後ろからした。

「 ・ ・ ・ !! ブラベリーさん !! 」

イノセントが後ろを振り向くと、ブラベリーの背中に大きな薔薇の花が突き刺さっていた。

ブラベリーはイノセントの背後へと周り、敵の攻撃を受けていたのだ。

「チッ、邪魔が入ったわね。」

「ブラベリーさん！！ しっかり！」

イノセントはブラベリーを支えつつ、意識を確認した。

「・・・イノ、セント・・・ 逃げて・・・」

ブラベリーはそう言うと、意識を失った。

「！！ ブラベリーさん・・・」

イノセントはそう言うと、涙を流した。

「さてと。 邪魔者は消えたから、次は貴女を消してア・ゲ・ル。」

敵はそう言うと、別の薔薇を手に召喚し、イノセントに突き刺す体制に。

「させるかあ！！ 炎華！」

敵が攻撃を仕掛けようとする、部屋に入ってきたプロミスが相手に向かって炎を放った。向かってくる炎を避けきれず、敵は炎の餌食となった。

「キャアアアアア！！」

敵は炎を食らい、炎を振りほどこうとしていた。

「プロミネンス！」

だがプロミスは炎から相手を逃がさず、もう一度必殺技を放った。炎は再び敵に襲い掛かり、敵を燃やし尽くした。

「隊長サマアアアア————！！」

敵は燃やされつつそう言うと、その場に崩れ燃え尽きた。

「ブラベリー！　しっかりしろ！！」

敵がいなくなったことを確認すると、プロミスはブラベリーとイノセントの元へ
プロミスは急いでブラベリーに突き刺さった薔薇を抜こうと、手を出した。

「ッ・・・クソッ、トゲが。」

だが薔薇には大きいトゲ以外にも細かいトゲが生えており、触る事が不可能だった。
触れば手が血まみれになる事は確定であろう。

「貴方は・・・」

イノセントは1回涙を拭い、プロミスに問いかけた。

「俺はプロミス・ザ・ヒート。　ブラベリーの連れだ。」

「・・・プロミスさん。　ブラベリーさんを持っていただけますか。」

イノセントはプロミスの名前を聞くと、依頼をだした。

「・・・あ、ああ。」

プロミスはイノセントからブラベリーを引き取り、今度は全身で抱える体制に。

「どうする気だ？」

「私のせいでこうなったんです。　ですから、」

イノセントはそう言うと、背中に純白の羽を出し自身の体を包み込んだ。

そして、羽から白い光が飛び交った。

羽がイノセントから離れると、イノセントはワンピース姿からドレス姿になった。

「・・・貴女は、一体。」

「私はイノセント・ザ・ラビット。 大天使ガブリエルの末裔です。」

イノセントはプロミスに軽く説明すると、手に造花を召喚した。

「どうかこの方に、天使達の祈りを・・・」

イノセントはそう言うと、造花から1つの光が飛び出し、ブラベリーの元へ。

光はブラベリーの中へと入り、ブラベリーから光が飛び交った。

すると、突き刺さっていた巨大な薔薇は根元から段々と消え、姿を消した。

「・・・う、ううん。」

薔薇が消え光が収まると、ブラベリーが目を覚ました。

「ブラベリー、大丈夫か？」

プロミスはブラベリーの顔を見つつ問いかけた。

「・・・大、丈夫。 平気。」

「よかった。」

ブラベリーはそう言うと、プロミスにもたれる体制から自力で立つ体制になった。

「・・・イノセント。」

「ゴメンなさい、ブラベリーさん。」

ブラベリーが言うのを聞きつつ、イノセントはブラベリーに言った。

「私、貴方の事を誤解してました。 本当に申し訳ありませんでした。」

イノセントはブラベリーに誤った。

今までの対応の悪さに。 そして、助けてもらった事に。

「・・・いい。・・・気に、しない、で。」

ブラベリーは嬉しそうにイノセントに言った。

「さてと、そろそろ帰ろうぜ。 マスター達が心配してるだろうからな。」

「・・・うん。」

プロミススの提案に、ブラベリーは同意した。

「私も、ご一緒いたします。 皆さんに謝らなければならない事がありますから。」

「わかった。」

イノセントもプロミス達と共に同行する事になり、3人は塔をあとにした。

その後、3人は自力で島を飛び立ち、ラプソディ達のいるカフェへと戻って行った。

カフェに戻ると、ブラベリーは心配されていた事を示すように存在達から声がかかった。

ブラベリーは元気な事を示すと、ラプソディに謝った。

イノセントも同様に、ブラベリーの件。 今回の件全てをふまえて誤った。

プロミスはホープに今日の事を話し、一件落ち着いたことを知らせた。

そして、今回の件で仲良くなったブラベリーとプロミスは、仲良く握手を交わしたのであった。

その後イノセントは、天空へと帰って行ったのであった。

— E P I S O D E E N D —